

3 漢方医学の構造

はじめに

中国伝統医学は、数千年の長い歴史をもち、広く中国文化圏で発展したために、歴史的にも、地域的にもさまざまな形がある。中国の中医学、韓国の韓医学、日本の漢方医学は、その代表的なものである。この三つの中国伝統医学は、共通の薬物、共通の処方を用いるが、まったく同じシステムというわけではなく、それぞれ独特の構造を有している。特に、中国の中医学と日本の漢方医学の間には大きな相違点があり、それらは両者の学問的交流の大きな妨げとなっている。このような状況を打破するためには、中国伝統医学の辿った歴史と、それぞれの国におけるこの医学の構造をよく知る必要がある。

中国伝統医学の構造

1 中医学

中国伝統医学は、その発祥のときから絶えず発展を重ね、次第に確固たる構造をもつようになった。現在では、それらを基礎にして一つのシステムが構築され、「中医学（TCM：Traditional Chinese Medicine）」という名の下に、この医学の共通の基盤として広く普及している。これがこの伝統医学の世界標準の形である（本書の内容はこの世界標準に沿ったものである）。以下にその骨格を記す。日本で行われている漢方医学については、この後に紹介する。

中国伝統医学を構成する要素は、基本的に他の医学とほぼ同じである。それらは、大きく、解剖生理学・病理学（病因病機学）・診断学・薬物学・処方学・治療学に分けられる。人体の正常な構造と働きを中国伝統医学独特の身体観（解剖生理学）で把握し、これらが異常を来した状態を病因と病機から解明し、望・聞・問・切の四診を用いて診断し、古代から連綿として蓄積された薬物学（本草）と処方学の知識を駆使して適切な処方を考案し、診断学によって導かれた治療法にもとづいてその処方を投与する。この一連の作業は**弁証論治**と呼ばれ、中医学の最も重要な骨格をなしている。

解剖学は、どの医学でも最も重要な基礎をなすものであるが、中国伝統医学ではあまり深く研究されてこなかった。ただ、その長い歴史の中で、2回の人体解剖の成果が発表されている。第1回目は新の王莽によるものであり、これは『靈枢』や『難経』に記された。第2回目は、宋代の盗賊たちの解剖記録であり、これらは、『おうきはんごそうず欧希範五藏図』や『ぞんしんかんちゅうず存真環中図』として残された。これらの成果は、解剖学の学問的発展に寄与したのではなく、後で述べる生理学的な諸現象の発現の場として認識されていた。

生理学は、生命活動を維持するために必要な物質（気・血・津液など）とその活動の場所（臓腑・組織・器官）の働きを明らかにするものである。気は、生体が生命活動を行うための基礎となる物質であり、血は生体を栄養し、津液は滋潤する。心・肺・脾・肝・腎の五蔵は、それぞれ5つの系統の機能的単位として、他の臓腑組織器官と連係して役割を果たしている。

病理学は、病因学と病機学に分かれる。病因とは疾病を引き起こす要因であり、外因や内因などいくつかの種類があるだけでなく、さらに細かく分類され、そ

れらの種類の違いにより発症する疾病の形も異なる。病因学は、それらの病因を分析するものである。病機とは疾病のメカニズムのことであり、生体を健康に保つための気血津液や臓腑の働き（正気）と生体を侵襲する病邪（邪気）、および両者の生体内での戦い（邪正相争）の状況により、さまざまな形態をとる。病機学は、気血津液、臓腑の病機を分析する一方、急性熱病に対しては、邪正相争の状況を六経分類や衛気営血分類を用いて分析するものである。

診断学は、望・聞・問・切の四診を用いて、疾病の病因病機を診断するものである。望診は視覚的な診察法であり、聞診は患者の発する音や臭いをみるものであり、問診は患者の話す内容を聞いて病態を判断するものであり、切診は患者の体に触れて病状を把握するものである。切診の主たるものは脈診であるが、日本では腹診が発達し、重要な役割を果たしている。

薬物学は、『神農本草経』以来の中国の伝統を受け継ぎ、四気（寒熱温涼）五味（辛苦甘酸鹹）の基本的性質の上に成り立つ薬効を解明し、それらが生体の病

因病機のどの部分に働き、どのような効果をもたらすかを知るものである。分類は、古くは上薬・中薬・下薬という神仙思想による分類を取っていたが、やがて自然分類となり、18世紀より薬効分類が用いられるようになった。

処方学は、約1800年前に書かれた『傷寒論』以来の伝統をもち、いくつかの薬物の複合からなる処方の薬効を解明するものである。各処方 は 疾病の病因病機に対応して作用するように組み立てられている。分類は、古くは病門別であったが、18世紀より薬効分類が用いられるようになり、現在ではそれを発展させたものが用いられている。

治療学は、診断学により把握した病因病機に対し、各種の治法を対応させて治療を行うものである。『傷寒論』では汗・吐・下・和の四法が主であったが、後に汗・吐・下・和・温・清・消・補という基本八法が工夫された。現在ではこれをさらに発展させた治法が用いられている。疾病の分析方法には上述のようにいくつかの種類があり、治療学はそれらに対応して組み

